

マカオ出土の中国陶磁

マカオ - マニラ - アカプルコへのつながり

宮田絵津子 (立教大学アジア地域研究所 特任研究員)

上田：それでは、立教のアジア地域研究所の特任研究員をされております宮田さんをお願いしたいと思います。宮田さんはスペインに長らく留学され、こちらに帰られてから立教大学で非常勤講師等を行っております。貿易陶磁とスペイン語とポルトガル語の史料を組み合わせて「16世紀から18世紀のマニラ-アカプルコ間のガレオン貿易」ということで、今年度に博士論文を立教大の方へ提出されて、学位を取られました。それでは、宮田さんの報告をお願いしたいと思います。

宮田：ご紹介にあずかりました宮田と申します。今回は博士論文に加えまして、今年の7月にマカオに調査に行ってみまして、マカオ出土の中国陶磁から、それとマカオ-マニラ-アカプルコという、その三つの地点のつながりというのを見ていきたいのですが、マニラの資料がかなり限られているので、実際にはマカオとアカプルコという2地点を見ていくような形になるかと思えます。

まず、マカオで出土している中国陶磁器を検証することを通して、マカオ-マニラ-アカプルコへの物流を考えていきます。その中でガレオン貿易を、特に初期の段階で支えていたのがマカオを拠点としたポルトガル人であった可能性が大きかったのではないかということについて考えてみたいと思います。その後、ガレオン貿易の最盛期を迎えますが、17世紀半ばの衰退の要因。いつとき、メキシコにおける中国陶磁器が激減する時期があります。これが一体何を表しているのか。その原因について探ってみて、最終的に17世紀終わりにまた交易が復活したかに見える交易のマニラへの物資の供給源が、ポルトガル人からもしかしたら中国人に入れ替わっていたのではないかという可能性についても考えていく。その一連の流れを見ていくことにいたします。

ヌエバ・エスパーニャへ運ばれた商品

まずアカプルコに運ばれていった商品ですが、絹が最も重要な産物、商品でありまして、次いで陶磁器でしたり、日本製の屏風や漆器などの奢侈品がありました。それから奴隷ですね。これは中国人も含めて国籍を問わずかなりの量のアジアで生まれた人たちがアメリカに奴隷として行った。そして奴隷として付いていった先で売られて、また奴隷となった。もしくは奴隷となった後、開放されて、自由にメキシコで暮らしていた人たち、それから自主的に自分たちでガレオン船に乗って新天地を求めてメキシコへ行った人たちというのがいます。それからこれは当たり前のことですが、東南アジアの各香辛料といったものが運ばれていきました。

ヨーロッパではポルトガルがいち早く独立を果たしスペインに先んじてアジア進出を果たしましたが、中国との直接的な交易の交渉に失敗し、1520年代から中国と公的に貿易を行うことを禁じられてしまいました。その後、中国南部、恐らくリャンポーのあたりで中国人商人や日本人商人と出会い貿易を行う密貿易の時代に入ります。この密貿易の時代というのは、ポルトガル人のある研究者が付けた名前ですが、こうした時代を経まして、1557年に中国からマカオが貸借され、広東での市、スペイン語では“フェリア”と呼ばれますけれども、中国製の物資を直接購入することが可能になりました。

一方、スペインは、ポルトガルに遅れること10年ほど、1521年にマガリャンイス (通称マゼラン) がセブ島に太平洋ルートで到着して、帰航のルートを探し続けること40年あまりかかります。1565年に初めてセブ島からアカプルコまでの航路を発見します。この時点

でセブ島のスペイン人を取りまとめていたのが有名な、後にマニラの総督となるミゲル・ロペス・デ・レガスピという人物ですが、彼は最初にポルトガル人からルソン島で中国人と日本人が交易をしに来ているという情報を得ています。そういった情報を得ながらも、国王に1565年、1566年、1567年、1568年と立て続けにほぼ同じ内容の書簡を出しているのですが、その内容というのが、中国人たちと接触するだけの兵士と武器がないため、ヌエバ・エスパーニャから兵士と武器をぜひ送ってほしいという内容の手紙を送っています。1568年の書簡の中では、国王に向けて70キンタル（1キンタル=46kg、70キンタル=3,220kg）。それに続いて130キンタル（5,980kg）のシナモンをミンダナオで手に入れたので、これをヌエバ・エスパーニャに送ったと。その帰りに火薬や武器を送ってほしいという窮状を訴えています。

こういった書簡を送っている一方で、1565年、66年、67年と立て続けにガレオン船をアカプルコへ向けて送っていたという事実が史料から分かります。

実際、レガスピの指揮下にあったスペイン人がどんな暮らしをしていたかということが、文献史料を通して見る限りでは、非常に少人数で武器も少なかったというのが実際の状況に近かったというふうに思われるのですけれども、では、どうやって中国人たちと実際に交渉して、アカプルコへ輸出する物品を調達したかについては、なぜか資料には残されていません。一番古い史料の中で具体的な状況が描かれているのが1586年の書簡ですが、1586年の段階に至っても、マニラの要塞というのは木製でできていて、支援を依頼しても送られてくる兵士たちの数は少なく、給料は支払われないうちに飢餓に陥る者も多く、加えて熱帯の気候のために多くの兵士たちは毎年死んでいってしまう。なので、毎年、兵士を送ってもらわないと困るということと、それから送られてきた兵士たちが死んでしまうか、もしくはそれが怖くて逃亡してしまうかのどちらかであるということが書いてあります。これを読む限りでは、マニラの町自体が防御性に欠けていて、まっとうな1植民地の首都として機能させるだけの資金がないということを示しています。

こうした中でガレオン船が出港しているという事実を見ると、商業だけが盛んで、それもフィリピン諸島に利益をもたらす形ではなくて、マニラが単純に物資、商品の通過点となっていたのではないかとも思われる姿をこの史料は如実に表しています。

史料にはポルトガル人の来航を示すものも多くありまして、中国人よりも高い値段でスペイン人にももの売りつけるとしてはいますけれども、それでもなお、スペイン人はポルトガル人との交易をやめることはしませんでした。

ガレオン貿易に参加していたポルトガル人商人

話は元に戻りますけれども、1565年から1572年までの7年間、どのようにしてガレオン貿易を運営させることができたのかというのが一つの問題として浮かび上がってきます。

具体的な商品が記載された文献が、1570年のものでして、これはエスピリトゥ・サントというガレオン船です。この中では、ポルトガル人によって運ばれた二つの容器と記されています。それからもう一人のポルトガル人、これは名前が具体的にフィリペと書いてありますけれども、ポルトガル人であり、フェリペという名前の人物が700個の中国陶磁器を送っていると書いてあります。それから、それとは別に、またあるポルトガル人所有の黒人で、黒人、ネグロnegroというふうに書いてありますが、メキシコ在住の商人に引き渡された奴隷と共に300個の陶磁器と20枚のルソンの粗い綿布を運んだと書いてあります。

通常の場合、アカプルコ、ガレオン貿易においては、どのような貿易もそうなのですが、送り主がいれば、必ず受け取る商人が向こうで待っていなければならないわけですし、このポルトガル人によって運ばれた二つの容器に関しては、これはゴルディアン・カササーノというエージェントがメキシコに在住していて、その人に引き渡されたというふ

うに書いてあります。それから一番下の黒人と共に300個の陶磁器というのは、これはメキシコに在住しているフリアン・メルカードという人物に引き渡されたということが書いてあります。

一つ謎なのもう一人のポルトガル人によって運ばれた700個というかなりの量の中国陶磁器というのが、これがフェリペという名前の人、ポルトガル人によって運ばれたわけですが、これは荷受人がいないのです。なので、恐らくこのフェリペ自身が運んで、実際向こうで、アカプルコからメキシコに持って行って、そこで売りさばいたという可能性が考えられるのではないかとというふうに思います。

このように1570年の時点でポルトガル人がガレオン船の、ガレオン貿易の商品を実際に提供していた。そして、自分たちで運んでいたというようなことが行われていたということは、つまりポルトガル人がガレオン貿易に対してかなり積極的に参加していたという態度が見受けられるものだと思います。それが特にこの初期の段階で見られるのが特徴的かと思えます。

もう一つ例を出しますと、1591年にマカオからアカプルコへ直接船を出していることもこれは文献から分かっています、ただし翌年1592年にマカオとアカプルコ間の直接の貿易というのは法律上禁止されてしまいました。

中国陶磁器の編年の標準となる沈没船

16世紀半ばごろから16世紀末にかけては、マカオとマニラ間の交易を通じて、多くの中国陶磁器がアカプルコへ渡ったというふうに考えられます。まず考古史料の方では、誰が何を運んだということは具体的には分からないのですけれども、中国陶磁器の陶片を見ていくことで、特にマカオとマニラ、アカプルコのつながりが少しずつ見えてくるのではないかとということでマカオに旅立ったわけです。こちらが今回、後ほどお見せいたします陶片の標準、年代を決める標準となる沈没船をちょっとご紹介します。

まず第1期となる16世紀半ばに沈没したFort San Sebastian号というポルトガル船が、これはモザンビークの沖合で1550年代頃に沈んだといわれています。これが一つの基準となるかと思えます。

それから第2期になりますけれども、1575年から大体1620年ごろ、標準となるのがゴールデン・ハインドという場所ですが、有名な海賊として知られるフランシス・ドレイクが捨てていった荷であるということで、これは有名なドレイク湾という地名がついています。それらの荷は1579年ということがはっきり分かっています。

それから、先ほど坂井先生のお話でもあったように、オランダとの戦闘で沈んでしまったサン・ディエゴ号。これが1600年です。

そして近年、水中考古学が非常に盛んなポルトガルのリスボンの少し北になりますが、カスカイスCascaisというところで1608年にノサ・セニョーラ・ドス・マルティーンレスという船が沈んでいます。

それから有名なウィッテ・レーウ号。これはオランダの船ですね。1613年にアフリカのサンタ・ヘレナSt. Helenaで沈んでいます。

そして、その次、第3期になるんですが、1620～1640年代、これはハッチャー・カーゴという、これも有名な沈没船ですが、これは中国の南部で発見されたもので、大体1640年代ごろではないかと引き上げ物から判断されています。

17世紀半の沈没船は、今の時点では見つかっていないという状況です。

そして、1670年代から1710年ぐらいまでの幅で一つの基準を設けるとするならば、ヴン・タウ・カーゴ、これはインドネシアで見つかっていて、康熙年間の中国陶磁器がたくさん見ついているという有名なもので、大体1690年という年代が与えられていま

す。

16世紀半ば～15世紀：メキシコ出土の中国陶磁器

実際に陶片を見ていきますと、**写真1**が16世紀半ばから1575年の間にメキシコで出土している中国陶磁器です。これが一つの例ですけれども、唐草文が内面と外面に描かれています。

写真2も同じくメキシコの中心地区にあるテンプロ・マヨール遺跡というところで出土している中国陶磁器です。これと比較したのが**写真3**のお皿ですけれども、これはモンテ・フォルテスというマカオの要塞から出土している陶片になります。モンテ・フォルテスというのは、ちょうど広東との出入り口を果たすような役割を果たしたポルトガル人が建設した要塞になります。建設年代は1622年ということなので、少し年代的にはずれが見られるのですが、早い時期の陶磁器もこのように出土していますので、1622年以前にも何らかの形で使われていたのではないかというふうに考えられています。

写真4はリスボンの国立美術館所蔵の中国陶磁器になります。これらの一群が大体、嘉靖年間、16世紀半ばごろから1575年あたりまでに入ってくる陶磁器ではないかというふうに考えると、メキシコで出ている陶片というのは、本当にごくごく初期の段階、1565年から1570年ほどの短い期間においてマニラからメキシコまで運ばれていった初期のものではなかろうかと思われます。

写真5もそうですね。左の陶片が先ほど申し上げたテンプロ・マヨール出土の中国陶磁器。右が完形品として出ているリスボンにあるアルメイダ財団という美術館所蔵の中国陶磁器。こちらは中に白菜のような文様が描かれているのですが、これはアルメイダ財団の方の年代決定でいうと16世紀半ばごろであろうというふうにいわれております。

写真6が1575年から1620年、ガレオン貿易が最も盛んであった時期の陶磁器の一つとなります。テンプロ・マヨール遺跡から出た、これは鳳凰文が真ん中に描かれているのですが、このタイプがメキシコでは最も多いタイプとして大量に出土していることが分かって



写真1 16世紀半ば～1575:メキシコ出土の中国陶磁器



写真2 メキシコ、テンプロ・マヨール遺跡出土の中国陶磁器



写真3 マカオ、モンテ・フォルテス出土の中国陶磁器



写真4 リスボンの国立美術館所蔵の中国陶磁



写真6 1575~1620: テンプロ・マヨール遺跡出土の皿



写真5 (左) テンプロ・マヨール出土の中国陶磁 (右) リスボン、アルメイダ財団所蔵の中国陶磁



写真7 マカオ、モンテ・フォルテス出土の皿



写真8 1575-1620s: テンプロ・マヨール出土の碗

います。これと比較して、小さな破片なので、わかりにくいかもしれませんが、**写真7**も同じタイプのもので、こちらがマカオのモンテ・フォルテス出土のもので、同じ鳳凰文のしっぽのところ、ちょっと陶片のところに見えるかと思えます。

写真8がテンプロ・マヨール出土の碗ですね。こちらは1600年のサン・ディエゴ号の出土の引き上げ品の中にある陶磁器と一致するものです。それと、こちらのタイプもサン・ディエゴ号から出土していますけれども、**写真9**はマカオのモンテ・フォルテス出土のおわんになります。

それから、その次に、先ほど坂井先生のお話にもありましたが、芙蓉手という景德鎮の輸出品の中で非常に人気のあったものなのですが、**写真10**が



写真9 1575-1620s: モンテ・フォルテス出土の碗



写真10 1575-1620年代： テンプロ・マヨール出土の陶片と完形品であるウィッテ・レー号の引き上げ品



写真11 モンテ・フォルテス出土の陶片 (マカオ)



写真12 ノサ・セニョーラ・ドス・マルティーレス(カスカイス：1608)

1575年から1620年代のものというふうには考えられているものです。左がテンプロ・マヨール出土の陶片と完形品であるウィッテ・レーウ号の引き上げ品が右側の方がお皿の写真です。

写真11もマカオで出ているモンテ・フォルテス出土の陶片ということで、これも全く同じタイプの芙蓉手になります。写真12がノサ・セニョーラ・ドス・マルティーレスというカスカイス、リスボンの北で沈んだもので、こちらは1608年。これも同じタイプの芙蓉手になります。

もう少し時代が下がったものが写真13です。今度は特に、これも芙蓉手ではありますが、先ほどの芙蓉手とこちらと比較して見ていただくと分かるかと思うんですが、余白がだんだん多くなってきます。白っぽい部分が多くなってきて、かなり細かいところの描き方が雑になっていくんですね。右側がハッチャー・カーゴからの完形品で、左側がメキシコのテンプロ・マヨールからの出土の陶片です。だんだん少し時代が下ってまいりますが、写真14がモンテ・フォルテスからの出土品で、こちらも先ほどのものと一致すると考えられます。

ハッチャー・カーゴの引き上げ品の中の皿が写真15になりますけれども、だんだん粗い文様になっていて、真ん中に鹿が2頭いるんですけども、後ろはただの横線で表現されているだけで、壁、壁面、内面、壁面のところには花文が雑に描かれているのが特徴です。こちらも1640年から大体1650年ごろではないかというふうには考えられます。

写真16がモンテ・フォルテス出土のお皿で、こちらも同じものが出ています。



写真13 1620-1650: テンプロ・マヨール出土の陶片と
ハッチャー・カーゴからの完形品



写真14 モンテ・フォルテスからの
出土品



写真15 1640-1650メキシコ、ソカ
ロ出土の皿とハッチャー・カーゴの皿



写真16 モンテ・フォルテス出土の皿

17世紀半ばのメキシコにおける陶磁器の不在

17世紀半ばですけれども、この時期の出土品は実は非常にメキシコでは少なく、大量にある、中心街から出土している中国陶磁器の中からたったこの2点しか見受けることができませんでした（写真17）。これはクロウ・カップと海外では呼ばれている、真ん中に鳥文が描かれている杯です。

写真18が今度、1670年代から1700年、もう少し、18世紀に入ってしまうものもあるかと思いますが、チョコレート・カップと俗にいわれている背の高い杯になります。これは1690年頃に沈没したヴン・タウ・カーゴや、文様からそれ以前と考えられる年代にも見られます。一番左の方の陶片がヴン・タウ・カーゴに積載されていたものに一番近いデザインですね。他のものは少し時代が早いのではないかという気がしますが、はっきりした年代は分かりません。ただ、こちらに関しては、出土地域がメキシコでは限定されているのが特徴的で、修道院やカテドラルといった宗教施設から、17世紀第3四半世紀から18世紀にかけて出土することが多いのが特徴です。

これはカトリックの断食の時期に飲料として飲まれていた慣習があることと考えられます。なぜ断食の時期にチョコレートをのんでいたということがわかるかということ、異端審問、宗教裁判でチョコレートを飲むか飲まないかというところで、要するにカトリック教徒はチョコレートを飲むけれども、カトリック教徒でない人たちは断食しないのでチョコレートは飲まないというような記載があることから、実際にチョコレートが断食の時期にカトリック教徒によって飲まれていたということが分かりました。それと、たまたまチョコレートの原材料であるカカオがマラカイボ、現在のベネズエラのマラカイボから良質のカカオがメキシコに向けて大量に輸出されるようになります。これが1670年代ですので、その時期とちょうど重なるのではないかなというふうに考えております。

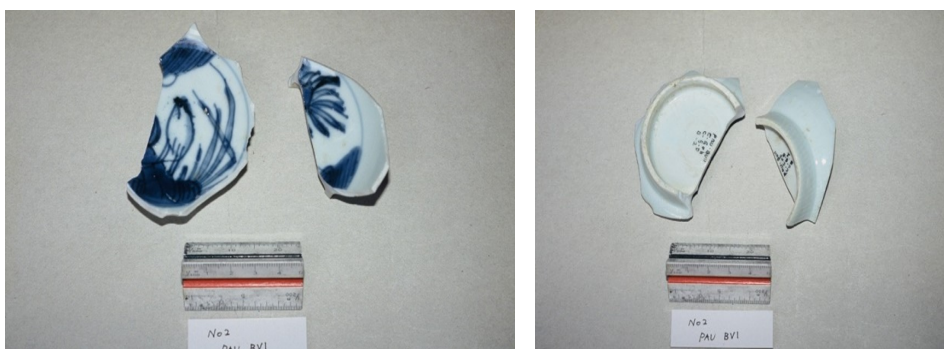


写真17 クロウ・カップ（17世紀半ば）



写真18 チョコレート・カップ（1670～1700）

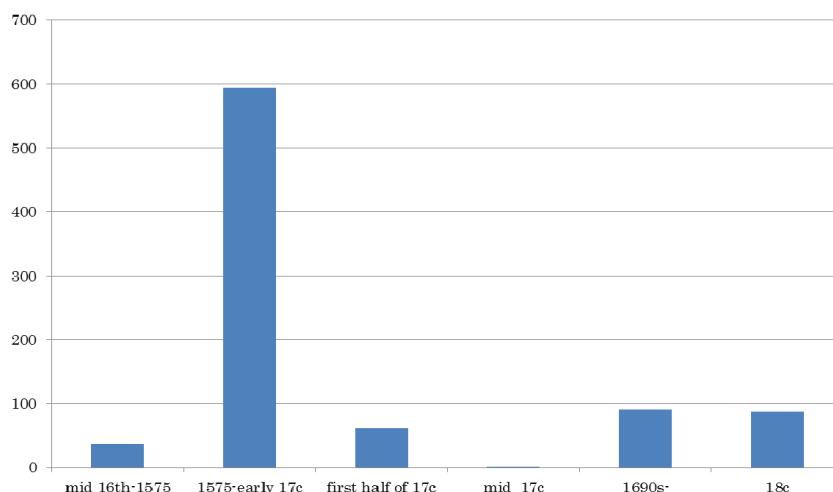


図1 時代を経て変化するメキシコ市における中国陶磁の出土量

さて、この17世紀半ばの中国陶磁器がほとんど出土しない時期に関して、**図1**を見ていただくと分かるように**1575年から17世紀初め**というのが大量に出てまして、これはメキシコ市内に限ってのことですけれども、**17世紀半ば**というのは本当に全くといっていいほど非常に少ない量の陶磁器しか出てきません。

これをどう説明するのか、どう考えるのかということですが、もちろん遷海令が出されたという清朝の明末清初の内乱というのが大きな原因として挙げられます。

もちろんその商人たちの動きは中国南部の海岸地域を中心に鈍っていたと考えられると思います。特に景德镇に関しては三藩の乱によって窯業の稼働率が著しく低下したということが佐久間重男先生の研究の中でも言及されておりまして、景德镇が復活するのは**1680年**ごろだといわれています。

しかし、実際、マニラには**1660年代**に台湾からの船が来航しているということが文献から分かっております。なので、全く中国の製品が手に入らなかったということではないということになります。供給があるにもかかわらず、メキシコにおいて**17世紀半ば**の中国陶磁器がほとんど見られないというのは、確かにアジアの方での交易活動が鈍っていたというのも要因としては考えられるのですが、それプラス受け入れる側、メキシコ側にも何か原因があるのではないかというふうに考えてみました。

一つ目の要因としては、**1640年**にポルトガルがスペインから独立を果たして、これが王権復古戦争と呼ばれて、**1668年**まで戦争が続きます。アジアでは、どうなったかというところ、マカオーマニラ間の交易というのは、先行研究の中ではいったん中断しておりまして、この時期、マカオからマニラにポルトガル人が行くことは許可されていませんでした。ですので、ポルトガル人達はマカッサルを経由してマニラにものを運ぶといったことをしていたようです。

それともう一つ大きな要因として、**1640年**を中心に大規模に行われたメキシコにおける異端審問というのが要因として考えられないかというふうに検討してみました。なぜかといいますと、**1640年**の文献史料では、メキシコにアジアの輸出、商品を輸出した商人**49人**のうち**9人**がポルトガル人の改宗ユダヤ教徒、あるいは隠れユダヤ教徒として同年または数年後の裁判で投獄、あるいは死刑にされています。これは全体のパーセンテージからするとそれほど多いとはいえません。実際、隠れユダヤ教徒といわれていた人たちがどれだけガレオン貿易に投資していたかというのはまだ分かってはいないのですが、ただ、分かるのは、例えば大商人といわれたシモン・バエス・セビージャという人物がメキシコにおりまして、その家族は互いにメキシコで融資を行って商売を行っていたというこ

とがわかっています。シモン・バエス・セビージャ自身はポルトガル出身であるけれども、そのお父さんというのはイタリアの方に逃げまして、イタリアの方にも親戚がいたようです。その家族全体が扱っていた商品は織物なんですね。このシモン・バエス・セビージャという人物も絹製品を中国から輸入してそれを売りさばっていたことで収入を得ていたということが知られています。

彼はどうしたかという、息子であるガスパル・バエス・セビージャという人物をマニラに仲介人として送り込んで、息子がメキシコに中国の絹を送り込むといったようなエージェントとして役割を果たしています。

こうしてヨーロッパ、アジア、そしてメキシコにネットワークを持っていたポルトガル人の隠れユダヤ教徒、もしくは改宗ユダヤ教徒たちというのはスペイン語でコンベルソ、ポルトガル語でノボ・クリスティアーノと呼ばれて、本来、スペインの異端審問を逃れてポルトガルへ移住して、その後、新天地を求めてアメリカ大陸、ヨーロッパ中東、アジアへと散らばっていった人々です。

先ほど言ったように、人数としてはそんなに多くはなく、全体のポルトガル人の商人の一部に過ぎなかったのですが、その世界的なネットワークを持つがゆえに、非常に重要な存在であり、メキシコの異端審問は結果としてその商業ネットワークを崩したということにもなるわけです。要するにその鎖を切ってしまったということになるわけです。

これはガレオン貿易に少なからず影を落としたということが、可能性としていえるのではないかと思います。1680年ごろから再び見られる中国陶磁器というのは、今度、チョコレート・カップを先ほどご紹介したのですが、これは実際、マカオでは1点も出土していません。つまりメキシコでは多く出土しているチョコレート・カップは、マカオーマニラーアカプルコのルートで輸出されたものではなくて、もしかすると福建ーマニラーアカプルコであった可能性が非常に大きいのではないかと思います。要するに17世紀半ばの空白を経て、商業の担い手が変わっていった、供給源が変わっていったという可能性がなかろうかというふうに考えたわけです。

17世紀半ば以降のマニラへの中国製商品の供給者

まとめに入りますが、1565年に始まったガレオン貿易は、そもそも少数、セブ島にいた武器も兵士も食料も不足していたスペイン人たちの手によって開始されたという考えはあまり現実味がなく、窮状にあったスペイン人達がいきなりガレオン貿易を始めていたという点では、矛盾していると考えられます。そして実際にメキシコで見られるガレオン貿易初期の陶磁器をみると、マカオのポルトガル人の私的貿易商人たちが原動力となって押し出していった、その開始を促していった要因になっていたのではないかと考えるのがより説得力があるのではなかろうかと思います。これを裏付けるのがメキシコで出土している16世紀17世紀半ば以前までの中国陶磁器が全てマカオで出土しているという事実です。

それから文献史料に見られる、毎年マカオからマニラへと船でやってくるポルトガル人と、その商売に対するスペイン人の不満の数々というのがマカオーマニラ間の交易が頻繁であったということを物語って、アカプルコへと輸出される中国や東南アジアの商品の多くはマカオが供給源であったのではないかとということが分かります。

その後の17世紀半ばに陶磁器の輸出がほぼ停止してしまったかのように見える状況は、中国を取り巻く明末清初の状態、情勢というのが挙げられますけれども、ガレオン貿易の場合はそれ以外の要因がメキシコ側にもあった可能性があり、それがスペイン、ポルトガル間の政治的緊張関係、戦争関係と、そして異端審問によるガレオン貿易の一つ、ガレオン貿易を一つの軸としたグローバル交易ネットワークの陥落であるといえるのではないのでしょうか。

ポルトガル人の改宗ユダヤ教徒たちが、ガレオン貿易に実際出資していた人々の多くは

一般のポルトガル人の商人たちのごく一部でしかなかったのは確かに事実ですが、彼らの果たした役割というのはそのネットワークの広さゆえに非常に重要で、ヌエバ・エスパーニャの経済に何らかの影響を及ぼしていたはずで。

再び17世紀終わりにアカプルコへ輸出されるようになった中国陶磁器というのは、マカオで出土している陶磁器と相違しているということから、マカオーマニラアカプルコといったルートというのが変化していった、実際、メキシコで出土しているものが景德鎮や徳化窯、それから漳州窯といったものがみられ、バリエーションが増えてくるので、こうしたバリエーションを見ると、そのポルトガル人が供給源であった時代を経て、今度は17世紀末から18世紀にかけては中国人、特に福建商人が供給源になって、担い手というか、商品を提供する商人としてポルトガル人の役割を入れ替わって行っていた可能性が非常に高いというふうに考えたわけです。

以上が発表になりますけれども、大体一連の流れをざっと足早に見ていきました。ありがとうございます。

質疑応答

フロアA：ポルトガル人がガレオン貿易の初期の段階で非常に大きな役割を果たしたのではないかというお考えですが、その頃はスペインとポルトガルはアジアの各地で衝突していました。ですから、ちょっと考えにくいのではないかと思います。

しかも、太平洋の東からアジアに向かってくる往路は何十年も前からあったのですが、メキシコに帰っていく帰路がなかなか見つからなかった。それをスペインが発見しました。そのときにはまだポルトガルはそんな航路は知らなかったはずで。

ですから、マニラにいたスペイン人がいかに少なかったといっても、スペイン人が非常に中心になって、このガレオン船貿易を始めたのではないかと思うのです。1580年に例のスペイン王室とポルトガル王室が一緒になりますね。ポルトガルの商人が重要な役割を果たしたとしたら、この辺からになるのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

宮田：おっしゃるとおり、東南アジアではスペイン、ポルトガルは確かに敵対関係にあったというのは事実でして、ただしこれは非常に矛盾することなんですけど、戦争は行いながらも、マカオから毎年船がマニラにやってくるということが文献に書いてありまして、スペイン側としては、フィリピンにいるスペイン側としては直接、中国と交易をしたい、もしくはマカオに行って交易を自分たちからしたいとなって、マカオに行きたいというような申請を何度も書簡で出しているのですが、結局これは非常に沈没というリスクが高いので、スペイン本国から駄目出しというか、それはポルトガルにリスクを負わせろという命令が下るわけです。

ですので、実際にマカオとマニラは行き来があったことは確かですね。特にポルトガル人に対しては、非常に複雑なんですけれども、嫌い嫌いは好きのうちみたいな感じのところがありまして、非常に税金を払わないだとか、値段をつり上げるだとかっていう文句をいろいろ書いている訳ですけども、その文句書いている。具体的に税金をマニラに入ってくる時に払わない。マニラでものを売るときに値が高いというのは、つまり彼らは売りに来ているということが実際にいえるので、その文句から実際に接触があったということが1565年以降見られますので、これは政治的には表向き、非常に仲が悪かったのですが、私が考えるにはスペイン人はアジアの交易系のネットワークにもまだ手をつけていない状況の中で、頼りになるのはポルトガル人であったということがいえるのではないかと、相反するアンビバレントな関係だったのではないかというふうに考えております

貿易陶磁と文献史料から東アジア・東南アジアの歴史を考える